

女

芥川龍之介

青空文庫

雌蜘蛛めぐもは真夏の日の光を浴びたまま、紅い庚申薔薇こうしんばらの花の底に、

じつと何か考えていた。

すると空に翅音はおとがして、たちまち一匹の蜜蜂が、なぐれるよう

に薔薇の花へ下りた。蜘蛛くもは咄嗟とつさに眼を挙げた。ひっそりした真

昼の空気の中には、まだ蜂はちの翅音の名残りなごりが、かすかな波動を残

していた。

雌蜘蛛はいつか音もなく、薔薇の花の底から動き出した。蜂は

その時もう花粉にまみれながら、蕊しべの下にひそんでいる蜜くちばしへ嘴を

落していた。

残酷な沈黙の数秒が過ぎた。

紅い庚申薔薇の花びらは、やがて蜜に酔った蜂の後へ、おもむろに雌蜘蛛の姿を吐いた。と思うと蜘蛛は猛然と、蜂の首もとへ跳りかかった。蜂は必死に翅を鳴らしながら、無二無三に敵を刺そうとした。花粉はその翅に煽られて、紛々と日の光に舞い上った。が、蜘蛛はどうしても、噛みついた口を離さなかった。

争鬭は短かった。

蜂は間もなく翅が利かなくなつた。それから脚には麻痺が起つた。最後に長い嘴が痙攣的に二三度空を突いた。それが悲劇の終局であつた。人間の死と変りない、刻薄な悲劇の終局であつた。——一瞬の後、蜂は紅い庚申薔薇の底に、嘴を伸ばしたまま横わつていた。翅も脚もことごとく、香の高い花粉にまぶされながら、

.....

雌蜘蛛はじつと身じろぎもせず、静しずかに蜂の血を啜すすり始めた。

恥を知らない太陽の光は、再び薔薇に返つて来た真昼の寂寞せきばく

を切り開いて、この殺戮さつりくと掠奪りゃくとに勝ち誇こっている蜘蛛の姿を

照らした。灰色の縀しゆす子に酷似こくじした腹、黒い南京玉ナンキンだまを想わせる眼、

それから癩らいを病んだような、醜みにくい節々ふしふしの硬かたまった脚、——蜘蛛

はほとんど「悪」それ自身のように、いつまでも死んだ蜂の上に

底気味悪くのしかかっていた。

こう云う残虐ざんぎやくを極めた悲劇は、何度となくその後繰返され

た。が、紅い庚申薔薇の花は息苦しい光と熱との中に、毎日美し

く咲き狂っていた。——

その内に雌蜘蛛はある真昼、ふと何か思いついたように、薔薇の葉と花との隙間すきまをくぐつて、一つの枝の先へ這い上った。先には土いきれに凋しぼんだ荅つばみが、花びらを暑熱ねじににおいに甘い匂においを放っていた。雌蜘蛛はそこまで上りつめると、今度はその荅と枝との間に休まない往来を続けた。と同時にまっ白な、光沢のある無数の糸が、半ばその素枯すがれた荅をからんで、だんだん枝の先へまつわり出した。

しばらくの後のち、そこには絹を張ったような円錐形えんすいけいの囊ふくろが一つ、眩まばゆいほどもう白々しろしろと、真夏の日の光を照り返していた。

蜘蛛は巣が出来上ると、その華奢きゃしゃな囊の底に、無数の卵を産み落した。それからまた囊の口へ、厚い糸の敷物を編んで、自分

はその上に座を占めながら、さらにもうひとつ天井、紗しやのような幕を張り渡した。幕はまるで円頂閣ドームのような、ただ一つの窓を残して、このどうもう犖犖な灰色の蜘蛛を真昼の青空から遮断しやだんしてしまつた。が、蜘蛛は——産後の蜘蛛は、まっ白な広間のまん中に、痩せ衰えた体を横たえたまま、薔薇の花も太陽も蜂の翅音はおとも忘れたように、たつた一匹兀々こつこつと、物思いに沈んでいるばかりであつた。

何週間かは経過した。

その間に蜘蛛の囊の中では、無数の卵に眠っていた、新らしい生命が眼を覚ました。それを誰より先に気づいたのは、あの白い広間のまん中に、食さえ断たつて横よこわっている、今は老い果てた母

蜘蛛であつた。蜘蛛は糸の敷物の下に、いつの間にか蠢うごめき出した、新らしい生命を感じると、おもむろに弱つた脚を運んで、母と子とを隔はてている囊ふくろの天井を噛かみ切つた。無数の仔蜘蛛こぐもは続々と、そこから広間へ溢あふれて来た。と云うよりはむしろその敷物自身が、百十の微粒びりゅうぶんし分子になつて、動き出したとも云うべきくらいであつた。

仔蜘蛛はすぐに円頂閣ドオムの窓をくぐつて、日の光と風との通つてゐる、庚申薔薇こうしんばらの枝へなだれ出した。彼等のある一団は炎暑を重く支えている薔薇の葉の上にひしめき合つた。またその一団は珍しいくえしように、幾重にも蜜いの勻においを抱いだいた薔薇の花の中へまぐれこんだ。そうしてさらにまたある一団は、縦横に青空を裂さいている薔薇の

枝と枝との間へ、早くも眼には見えないほど、細い糸を張り始めた。もし彼等に声があつたら、この白日の庚申薔薇は、梢こずえにかけたヴィオロンが自ら風おのずかに歌うように、鳴りどよんだのに違いなかった。

しかしその円頂閣ドームの窓の前には、影のごとく瘦やせた母蜘蛛が、寂しそうに独り蹲うづくまつていた。のみならずそれはいつまで経つても、脚一つ動かす気色けしきさえなかった。まっ白な広間の寂せき寞ぼくと凋しぼんだ薔薇つぼみの苔つぼみの勻と、——無数の仔蜘蛛を生んだ雌蜘蛛はそう云う産所んじょと墓とを兼ねた、紗しゃのような幕の天井の下に、天職を果した母親の限らない歓喜を感じながら、いつか死についていたのであつた。——あの蜂を噛み殺した、ほとんど「悪」それ自身のよう

な、
真夏の自然に生きている女は。

（大正九年四月）

青空文庫情報

底本：「芥川龍之介全集3」ちくま文庫、筑摩書房

1986（昭和61）年12月1日第1刷発行

1996（平成8）年4月1日第8刷発行

底本の親本：「筑摩全集類聚版芥川龍之介全集」筑摩書房

1971（昭和46）年3月～1971（昭和46）年11月

入力：j.utyama

校正：earthian

1998年12月28日公開

2004年3月9日修正

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.waozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

女
芥川龍之介

2020年 7月12日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>